

んに加藤はん」

「なんや難波戦記みたいな人ばつかりやがな」

「前へ行き」

「へい何誰も御免やす、何誰も御免」

「オ、若い方に講釋とは面白い、お前方は陽氣な話落語でも聞きに行たら何うやね」

「へえ私話が好きだんねが、落語家に犬糞の恨が無いもんだつさかいに唐辛の粉を燻べ」

「コレ餘計な事を饒舌りな、オイ肝心の物を貰ひんか」

「肝心の物てなんや」

「火鉢を貰はんとあかんがな」

「それを忘れてるね、姐はん、姐えはん」

「これ何と云ふ聲を出すね」

「火鉢に火を仰山入れて持つて來とくなアレ唐辛の粉をくす」

「これ饒舌りないな」

「大きに憚りさん」

「コレ何をしてるね、今から燻べて何うするね、まだ講釋師が出てエへんがな、一寸待ちんか、傍の

人に悟られたら何もなれへんがな、これ其方から煽いで何うするね、お前大分にチヨカやな、待と

云ふのに、それでわ私が噓をするがな、コレ待んか、コレま、まちといふのに、ハア、クシヤン、

ハアクシヤン」

「アハハハハ、これなら唐辛でも大丈夫や」

「これ、私で測量をしやがるね」

そうこうする間に出て來ましたのが講釋師、落語の方は舞臺へ出ますと直ぐに演りますが講釋の方は中々高座へ上りましても納まり返つて、鑄屋の親爺が軍艦を受取つた様な顔をして、是れでも昔は軍談讀と云ふて空俵の二十俵も取つた者ぢやと云ふ様な顔で湯吞へ湯を注いで一度頂く、小笠原流の肘張りもんで、湯を頂いて飲む程丁寧な奴かと思ふと家賃の三ツも滞らしてるづぼらな奴が多い。

「エヘン、お早くからお詰掛け下さりまして有難き仕合せに御座ります。毎度讀上げますは赤穂復讐錄義士銘々傳の義に御座ります。愈、今晚の處では山鹿流の陣太鼓の音を止め吉良が邸へ亂入の一條、私も餘程讀場に御座りますればお客さん方此講釋を聞かずんば有るべ可らず、前席にお人寄せの御愛嬌として一二席づゝ伺ひますは何處の嶋々谷々津々浦々へ参りましても御馴染深き慶元兩度は難波戦記のお話、頃は慶長の十九年も相改り明れば元和元年五月七日の儀に候哉、大阪城中千疊御上段の間には内大臣秀頼公、御左座には御母公淀君を始めとして介添として大野道犬主馬修理之助